

どれを読んでもおもしろそう？！

14歳の世渡り術 シリーズ こんなのはいかが？

『みえない未来相談室。すきなコトを仕事にする方法』

k. m. p. / 著 2008

k. m. p. は、なかがわみどりさんとムラマツエリコさんの2人。旅に出て、旅のことを本にまとめる仕事を一緒にしている2人。すきなコトを仕事にしている2人が、自分たちの10代を振り返り、10代に向けて書いたイロイロ。「何をやりたいのか分からない」「自分のこと好きになれない」「おとなになれば、きっと…」等の思春期の悩みを、現在の様子と比較している。K. m. p. とは何の略なのかも書かれている。イラスト中心なので、サラッと読める。

『動物の死は、かなしい？ 元動物園飼育係が伝える命のはなし』

あべ弘士 / 著 2010

著者のあべ弘士さんは、旭川市旭山動物園で25年間、飼育係として働いていた。あべさんは高校卒業後、鉄工所で働き、絵描きを目指して図書館通い、そして自然と関わる仕事を希望して飼育係になった。先輩の死や動物の死と隣り合わせの日々。飼育方法や動物園の在り方、わずかな予算に頭を悩ませ手さぐり状態の中、アイデアを出して工夫をする。この時レポートにまとめた理想の動物園が15年後に現実のものとなるとは知らず。現在は絵本作家として活躍する著者の奮闘ぶりを通して、動物や動物園について考えさせられる一冊。

このシリーズでは、※と吹き出しを使って、難しい言葉や読み進めるために知っておいてほしい言葉の説明がある。章末でなく、同じページ、もしくは次のページにあるので理解の助けとなり、読み進めるのが楽！

『14歳からわかる生活保護』 雨宮処凛 / 著 2012

「生活保護」と聞くと、本当は働けるのに怠けている人が多いと思われがち。そんな印象を払拭する事実や状況を紹介する著者。本来なら生活保護を受けられるのに、さまざまな事情と状況の結果、餓死・孤立死する人々の存在。受給者の話を聞いたり、現場で奮闘する人々にインタビューしたり、日本と他の国の状況を比べたりしている。本当に困ったときの生きるノウハウを伝えたい著者の気持ちが表れている。巻末にはコピーして使える生活保護申請書が付いている。

『自分はバカかもしれないと思ったときに読む本』 竹内薫 / 著 2013

小学校3年生でABCも分からずに父親の転勤でアメリカへ行った著者は、授業が分からずバカかと思われた。そして、小学校5年生で急に帰国が決まって日本へ戻った時も、漢字が読めず、バカかと思われたという。自身の経験から、周囲の人々や環境から「バカは作られる」という考えを持つ。しかし、バカはこじらせなければ大丈夫！と断言。バカと呼ばれた偉人の話から、フィードバックをもらう大切さ、目標設定の大切さなどを教えてくれる。

『医者になりたい君へ 心臓外科医が伝える命の仕事』 須磨久善／著 2014

著者は、世界初の方法によるバイパス手術や日本初のバチスタ手術を成功させた心臓外科の医師。医者になるためには「チームワークとリーダーシップ、どちらも必要！」なこと、「諦めないことと、裏切らないことが大切！」なこと等を紹介する。救えなかった命にも触れるほか、「あの時、こう思ったからこの仕事を選んだ！」と思える原点の大切さを子どもたちに伝えていこうという姿勢が伝わってくる。

『ほかの誰も薦めなかったとしても今のうちに読んでおくべきだと思う本を 紹介します。』 雨宮処凛／著 2012

合計30名の各界の著名人が、若者に読んでほしい本を選び紹介している。そのオススメリストに挙げられた本は様々。14歳にオススメリという目で眺めると、なかなか刺激的なラインナップ。いくつかタイトルを羅列してみると、『宮本武蔵(吉川英治著)』、『フラニーとゾーイ(J・D・サリンジャー著)』、『博物誌(ジュール・ルナール著)』、『火の鳥4・鳳凰編(手塚治虫著)』、『利己的な遺伝子(リチャード・ドーキンス著)』、『オリент急行の殺人(アガサ・クリスティー著)』、『若きウェルテルの悩み(ゲーテ著)』、『東京日記(内田百閒著)』、『論理哲学論考(L. ウィトゲンシュタイン著)』、『虚無への供物(中井英夫著)』。大人になったあなたもぜひ！

『学校では教えてくれないお金の話』 金子哲雄／著 2011

著者の金子さんは、流通ジャーナリスト。中学生の時に、自分の一生にいったいどのくらいのお金が必要なのかを計算した金子さん。高校・大学の進学費用から結婚、住宅ローン、老後、葬式まで。そんな金子さんが14歳の若者へ金銭感覚を磨くための方法や知識を伝授する。専業主婦の労働をお金に換算する身近な視点から、インフレやデフレ、モノの値段やお金の価値について。様々な知識や情報が盛り込まれ、「お金を回せる大人」になれるよう指南する。

『受験国語が君を救う！』 石原千秋／著 2009

大学教授である著者による、高校受験の国語とは何かをまとめた一冊。評論と小説の解き方が具体例を挙げて説明されている。受験国語では、現在通用しているパラダイムを知っているかを問う。つまり常識を身に着けているかどうか問われる。しかし一方で、世の中の「常識」は無自覚に共有されているパラダイムによるもので、絶対的な正義ではないことも述べられている。著者の「受験国語が君を救うのは、君がいい点を取った時ではない。君が受験国語を「これは一つの答えでしかない」ということを切実に知ったときだ」という言葉を肝に銘じたい。

『アイデアはどこからやってくる？』 岩井俊雄／著 2010

テレビ番組の「ウゴウグルーガ」のCGキャラクターデザインやインタラクティブなシステムづくりに関わった著者。近年では、『100かいだてのいえ』や『ちか100かいだてのいえ』を考えだし、子どもたちに大人気。メディアアーティストとして活躍している著者の生い立ちから、実際に開発した作品、子どもたちから教わるアイデア等々。工作のアイデアやパラパラ漫画をノートに書き留めていた少年が成長し、高校では先生に「お前は個性がない！」と言われたが美術系の大学に進んだ話など進路選択に迷っている10代にもオススメリしたい。

『本を味方につける本 自分が変わる読書術』 永江朗／著 2012

フリーライターの著者が若者に向けて本や読書との付き合い方を説明。なぜ本を読むのか、どんな本を読むのか、どんな読み方をするのか。また、古書店や専門書店、図書館の利用方法のほか、本の扱い方なども紹介されている。しかし、最後には「本を読まない人をばかにしてはいけない」、「本を読まない人にもいい人はいる」、「本を読むことを過剰に評価してはいけない」といった言葉で締めくくられている。最終章の最後の一文は、「本を読むより大切なことがたくさんある」。